Osaka University Knowledge Archive

Title	対抗宗教改革期のヴァラッロのサクロ・モンテ礼拝堂内部装飾の変容
Author(s)	大野, 陽子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46573
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【28】

氏　　名	大野陽子（おおのようこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９９５４　号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**対抗宗教改革期のヴァラッロのサクロ・モンテ礼拝堂内部装飾の変容**
論文審査委員	（主査） 教　授　若山　映子 （副査） 教　授　圀府寺　司　　教　授　上倉　庸敬

論文内容の要旨

本論文は、序、本文６章、結語（註を含み 400 字×約 950 枚に相当）と別冊図版（A4 判 187 頁）からなり、北西イタリアの小村ヴァラッロの後方に聳える山上に、パレスティナの聖跡の代替巡礼地としてフランシスコ会士によって 15 世紀末に創建された、45 棟の礼拝堂を擁するサクロ・モンテを主題とする。特に、1593－1613 年にノヴァーラ司教であったカルロ・バスカペーの指導下に建設された礼拝堂と、実現された内部装飾を研究の中心に据えて、建物の構造、各礼拝堂内に表わされた画像と塑像の構成の工夫、および図像の意味を考察し、カトリック改革期における宗教思想と美術表現の融合の諸相を論じている。

序ではサクロ・モンテの現状を概観し、先行研究の傾向と内容を整理したうえで、対抗宗教改革期に焦点を絞って研究の深化を図ることを予告する。第１章においては、創建当初に遡って、1514 年出版の案内書に初期構想の意図を読み、次いで、17 世紀までの歴史を辿って、造営監督担当者や、建築、塑像、絵画担当の芸術家の交代を記録に追い、それに起因する構想の変遷を詳細に分析し、それぞれの草案の意図の解明を試みる。第２章では、1580 年代にアルプス南域各地で次々と建設されたサクロ・モンテを概観し、トレント公会議以降、教会指導者たちが推奨した芸術の理想と信心形式の関係を論証する。第３章では、ヴァラッロを管轄区に含むノヴァーラ司教に着任したバスカペーによる再整備構想を、彼の書簡と、当時実現した礼拝堂装飾の特性の調査によって検証する。かつて巡礼は礼拝堂内に入り、像の間を巡ることができたが、16 世紀後半になると、その入口に設けられた木製障壁の覗き窓をとおして、訪問者は内部の聖劇を眺め黙想するように改装された。その変更が公会議の決定事項に起因することを、古文書や当時の芸術論の精読よって本章は明らかにする。第４章の主題は、司教の再整備構想に基づいて 17 世紀初頭に完成した〈カルヴァリオへの道〉礼拝堂である。そこでは、塑像による十字架を担うキリストと群衆の後方の三壁面上方に、『旧約聖書』を原典としてキリストの受難の予型となる画像が額絵として飛翔する天使に掲げられ、聖句の記された巻紙が舞っている。それら画像と塑像の配置が覗き窓からの視線を考慮して決定されていること、そこに司教の意図が実現されていることを、史資料の綿密な調査、教父の著作や中世の黙想書の記述と堂内の聖句との照合によって、本論は初めて明らかにした。また司教の着想源が、教皇シクストゥス５世が 1580 年代に実現させたローマのスカラ・サンタの壁画である可能性と、モラッツォーネがそれを熟知していた理由の故に、本礼拝堂のフレスコ画制作を委嘱された可能性とを推論する。第５章で考察する、比較的狭小な空間の〈ピラトの審問所〉礼拝堂を担当したタンツィオ・ダ・ヴァラッロは、透視図法を巧みに用いて、実際の壁面を突き抜けて街路が延びるかのような景観を描いた。

広がりのある擬似空間を実現するために彼はまた、額絵ではなく空中にはためく３枚のタペストリーとして予型論に基づく図像を表わし、礼拝堂の角を巧みに隠している。塑像制作者である兄ジョヴァンニ・デンリーコとの緊密な協力によって実現されたその礼拝堂の特性を本章は詳述する。第６章では〈手を洗うピラト〉礼拝堂の壁画に注目して、画像の意味を解読したうえで、サクロ・モンテが、「地上のエルサレム」が滅んだ後に現われる「天上のエルサレム」を類推させる理想的聖地と見なされていたとの解釈を提唱し、その考えに則って〈手を洗うピラト〉礼拝堂が構想されたと論じる。結語においては、ヴァラッロのサクロ・モンテの全体像に関する論者の考えが纏められている。

論文審査の結果の要旨

ヴァラッロのサクロ・モンテは、広場を囲む多様で複雑な建物の景観、聖堂建築に絵画と塑像が組合された、極めて特異な宗教美術の集合体である。そこで、特に15世紀末から17世紀半ばにかけては、北イタリアを代表する大画家、建築家たちが入れ替わりながら構想を練り制作に従事した。しかし個々の芸術家論の中でその活動が言及され、地元研究者の地道な古文書調査の成果はあるものの、専門的で総合的な研究は未着手な状況であった。

論文申請者は、修士課程在籍中から９年余り、現地での綿密な作品調査、500点以上の文献研究、各地に保管されている古イタリア語の文書やラテン語による『聖書』と教父の註解書の精読をとおして、数世紀の間に礼拝堂の配置と順路、礼拝堂内部の役割の変更と改変などが繰り返されて変貌しながら今日に至った聖地の全体像の解明に、根気強く取り組んできた。その結果、ヴァラッロのサクロ・モンテに見られる造形芸術とその思想的な時代背景のほぼ全容を明らかにした。かつて判読されることのなかった聖句を解読し、その原典と意味を解明し、建築空間と画像、塑像との関係を分析して、当時の宗教美術の役割を明晰に論じた第３～第５章は、特に、欧米語で発表されれば高い評価を得るであろう。

惜しむらくは、申請者がキリスト教を本格的に知る機会をもたなかったことから、『聖書』に書かれたいくつかのことばの神学的な解釈、あるいは宗教上のことばの用い方において多少修正さなければならない点が最終稿にも散見された。しかしそれらによって論旨が破綻するわけではなく、それらは充実した内容をもつ本論文の優れた価値をまったく損なうものではない。よって本論文を、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。